



Title	E.H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究
Author(s)	谷村, 千絵
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 谷 村 千 絵

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 18332 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

人間科学研究科教育学専攻

学 位 論 文 名 E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 藤岡 淳子

(副査)

教 授 秦 政春 助教授 藤川 信夫

論 文 内 容 の 要 旨

ジェネレイティヴィティ (generativity) は、エリクソン (Erikson, E. H.) のライフサイクル論の「成人期」の調和的傾向を示す概念である。本研究は、この概念の形成過程を明らかにするものである。

近年、アメリカ合衆国と日本の心理学の分野においては、エリクソンの発達理論の「成人期」を特徴づけるジェネレイティヴィティ概念に注目する研究が多く見られるが、しかしながら現在の諸研究では、それぞれの関心からこの概念が「応用的」にとらえられ活用されているといった状況にあるといえる。エリクソンがジェネレイティヴィティ概念をどのように形成し、またどのように変容させていったのか、ということ明らかにする研究はなされていない。本研究では、エリクソンの理論形成過程を年代ごとに跡づけ、ジェネレイティヴィティ概念形成過程を明らかにした。また、ライフサイクル論を端的に示すものとしてよく知られているエビジェネティック・チャートにも注目し、とりわけチャートの空白箇所の解釈可能性について、エリクソン自身の言明によって裏づけながら、考察するというアプローチをとった。

本論文は第一部を「問題と目的」とし、心理社会的発達理論の基本構造を提示し、先行研究の検討を行った。第二部は、1950 年代から 80 年代までのジェネレイティヴィティに関するエリクソンの見解の変化を追った。第三部は、1969 年に出版された中年期を主題とするサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth* (1969; 邦訳『ガンディーの真理』1973) と 70 年代、80 年代の見解の変化を追った。

ジェネレイティヴィティ概念の形成過程は、次のように特徴づけることができた。第一に、「成人初期」に関する理論の中で、フロイトの心理学的理論を発展させる過程で発達段階論の基盤が形成され、またこうした文脈の中でジェネレイティヴィティ概念が誕生するまでの系 (1950 年代、第三章)。第二に、「世代サイクル」の視点が確立され、心理社会的発達段階論がライフサイクル論として提示されるとともに、ジェネレイティヴィティ概念が「相互性」の要として明瞭に位置づけられ、社会進化的、プラグマティズム的傾向が表れてくる系 (1960 年代、第四章)。第三に、「儀式化」、「擬似種化」の概念が導入され、ジェネレイティヴィティを支えあるいは阻止する社会的、文化的、歴史的要素に関する考察が展開され、社会様式 (モード) の意義が明確化されていく系 (1965 年以降、第五章)。そして、60 年代前半から着手され 1969 年に出版された中年期を主題とするサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth* (1969; 邦訳『ガンディーの真理』1973) では、それまでになされたこれら 3 つの系における考察が活用され、また問い直される形となっている (第六章)。その後 70 年代、80 年代にかけては、成人やジェネレイティヴィティにつ

いて、映画や往復書簡など具体的な題材を解釈するなどの積極的な発言が増えるものの、その見解は異世代関係や「親密性」における自己生成論的な様相が強くなり、アイデンティティ論もしくは 50 年代の見解に回帰したと見なすことができる（第七章）。それぞれの時期でジェネレイティヴィティに関する見解は変化し、この概念は厳密な定義から生まれたものではなく、また最終的に統合的な定義もされていないことが明らかである。しかし、にもかかわらず、この概念の形成過程こそが、エリクソンが人間発達理論の構築において取り組んだ問題を如実に示しているといえよう。

論文審査の結果の要旨

エリクソンのライフサイクル論、およびその中で重要な位置を占めるアイデンティティ、青年期、ジェネレイティヴィティ等の概念は、これまでステレオタイプのイメージで捉えられるか、あるいは、臨床的関心のもとで様々に解釈され適用されてきた。こうした状況を踏まえて、本研究は、エリクソンのジェネレイティヴィティ概念を取り上げ、その概念がエリクソン理論の発展過程の中でどのように意味を変容させていったのか、その過程でいかに多様な内容を包括していったのかを改めて解明しようとする試みである。

第一章では、この概念が 50、60 年代にフロイト理論の批判的継承としての心理・社会的発達理論の枠内で構想され、さらに社会進化への貢献や世代間関係の型（儀式）としての文化との関わりという内容をも包摂し、一応の完成を見る過程を明らかにしている。第二章では、サイコヒストリー研究『ガンディーの真理』における、ジェネレイティヴィティ概念の展開と錯綜を明らかにし、最後に第三章では、錯綜したジェネレイティヴィティ概念が、男女成人の性役割に即して分裂していく過程を解明している。

本研究の成果は、エリクソン理論の発展過程において、ジェネレイティヴィティ概念が、多くの矛盾をはらみつつも多様な意味内容を指し示していることを明らかにし、通俗的なエリクソン解釈を再考を促すものであるという点で高く評価される。

以上、当論文は、とくに文献解釈の緻密さ、論理構成能力という点から、博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。